



[講演]

外国語教育の新しい形： 社会認知的視点からみる 学習評価

外国語教育研究センター准教授
三島 雅一 氏

○任 次に、三島雅一先生にご講演いただきます。ご講演のタイトルは「外国語教育の新しい形-社会認知的視点から見る学習評価-」です。三島先生、よろしくお願いいたします。

○三島 よろしくお願ひします。それでは、画面共有をさせていただきます。音声等問題がありましたらちょっと教えていただければなと思います。どうでしょうか、見え方問題ありませんでしょうか。

それでは、プレゼンテーションを始めさせていただきます。外国語教育研究センター所属、英語の科目を担当しております三島と申します。本日は、「外国語教育の新しい形」ということで、今現在、外国語教育研究センターの科目の大きな刷新を続けており、その経験と英語教員としての経験から、新しいグローバル・コンピテンスと外国語教育の接点探っていきたいと思っております。【スライド④-1】

まず、今日お話ししたい主なトピックですが、まず問題提起からさせていただきますと思います大風呂敷な問題提起となりますが、これからの外国語教育の目指すべき方向性というのは何なのか。そして、社会的活動参画への手段としての外国語教育とは何なのか。それから、今現在行っているカリキュラムの刷新の一例として、昨年から開講を始めました全学1年生の必修の英語ディベートコースの開発と評価方法の事例を紹介しながら、外国語教育が今後どうあるべきか、私なりの意見と、考えをお話させていただければと思います。【スライド④-2】

まずはじめに従来型の外国語教育、一般的に行われている外国語教育の形に関する問題点の指摘を少しさせていただきたいと思います。英語教育では、先ほど

坂本先生がおっしゃっていました文法主導の教育というものから、少し早く脱却をし始めたと思います。コミュニケーション能力へのシフト、つまり。言語の運用能力の育成にフォーカスが向いています。その背景には例えば中学校、高校と6年、英語教育を受けてきたのに全く何もしゃべれない教育から脱却して、よりコミュニケーション能力、運用能力を鍛えていくべきではないかと考えられるようになってきました。その結果いわゆるスキルベースと言われる教授法が盛んに行われるようになってきました。今の大学も、おそらくほとんどって言うてもよいかもしれませんが、4つのスキルを意識した能力の育成を目的とした英語教育が非常に一般的ではないのかなと思います。

このスキルベースの授業では、書く、話す、聞く、読むという4つの技能の育成を目的としますが、まず私が1点、ここで問題と感ずるのが、何のためにそれぞれの技能の習得を目指すのかというコンテキストの不在というのが挙げられます。ここでいうコンテキストの不在というのは、学習が一体どういう方向につながっていくのかという意味合いで、背景情報といいますか目的、方向性が少し薄いのではないかなと。何のために書き、例えば誰に書くのかとか、どこで書くのか。通常言語活動を行うときには必ず明確なコンテキストが存在していて、そこに必要な言語的リソースを自分自身で選択してコミュニケーションを図っていると思います。ところが言語学習の現場になるとこのコンテキストの部分が、十把一絡げで英語能力を育成するためというところに終局してしまう。学生もみんなそう思っていると思うし教員もみんなそう思っていると思うのですが、学習の現場でこの書くという行為は一体何につながっていくのか、これをもっと可視化していくことが重要なんじゃないかと考えています。【スライド④-3】

それからもう1点ですが、従来型の問題点として、語学能力の孤立を挙げていますが、語学の習得のために行っていくさまざまな活動の中に本来的に含まれている能力というのは本当にこの大きな「語学能力」という塊だけなのかなと感ずています。語学能力を磨く上で、もっと色々な能力の育成が実はされているのではないかと、あるいはもっとそういうところを前面に押し出すべきではないかと思っています。そういう意味で、ここでは外国語教育の持つ多様な目的と意義の過小評価がされている。つまり我々は語学能力、例えばスピーキング力といった形で考えやすいのですが、私の理解する意味での国際社会における活動能力。そこに必要な資質や能力というものを磨く、あるいはそういった資質や能力を磨く

下地となるものも含んでいる。語学学習の中にそういったものが内包されているのではないかと考えています。例として幾つかこちらに書いていますが、コミュニケーションの能力といっても、専門的知識であったり、人との協調性であったり、異文化を理解する力であったり、批判的な思考をしたり分析をしたりと、コミュニケーションというのはやはり交渉したり、互いにインタラクションをしながら、さまざまな形で自分と相手とを調和させていく活動だと思えますので、当然コミュニケーションを行う場に応じて必要とされる知識も変わってきますし、批判的思考がより求められる場面もあるでしょうし、分析能力をより求められる場面もあると思います。そういった意味で語学を学習する中に、実はこういう国際社会における活動能力、国際社会の一員として必要な、より広義で普遍的な能力も育成できる。そういった可能性が語学学習、外国語教育に内包されているのではないかなと考えています。【スライド④-4】

その上で、さらに1つ、問題提起として、これは私自身が感じていることですが、特に大学教育の現場では、まず学生は皆さん学部にも所属されており、大学は専門教育の場であると。対して外国語教育というと、英語は大事だ、大事だと言われつつも、やはり外国語教育というのは大学の中で、付録という言い方も変ですが、まず学部での専門教育に重きがあり、そこに勉強をしに来ていて、そのおまけではないですが、そこに語学をちょっと放り込んでいます。こんな形で、ちょっと歪なバランスを感ずることが時々あります。もしこのグローバル・コンピテンスというものがあるのなら、これからの人材を育成していく、教育の目的の1つとして重要なのであれば、これが学部教育のみで完結可能なものなのかなというのは、自分自身が問題として感じているところです。同時に、それを考えたときに外国語教育がもたらせる恩恵というのは実はすごく自分たちが思っている以上に大きいものではないのかなと感じています。【スライド④-5】

これからの外国語教育の目指すべきものというところで、1つ、社会認知的視点、Socio-cognitive というアプローチがあります。これは第二言語習得理論における主流の考え方とはかなり違いますが、非常に今の全人格的な言語教育といえますか、そういった視点、今までの言語教育の基礎となった例えば構造主義だとか文法主導の教え方だとか、いろいろな意味で第二言語習得のアプローチと比べて、その基本的な理論として今の時代に合っているなと感ずるアプローチです。この社会認知的視点から見ると言語というのは社会的活動を行うための手段

であると。すなわちここでは、私の訳文で申し訳ないのですが、魚を売ったり議論をしたり話を共有したり子どもをなだめるといったような活動であると。これは例として挙げられているものですが、社会認知的な視点というのは、結局、言語というのは社会活動を行うために存在していると。この社会活動をいかに定義していくか。ここが学習に落とし込むときに、我々が教える側に回ったときにどう教えるのかを考える際のキーワードになってくると思います。もし言語が社会的活動に効果的に参加するのが目的であると仮定するのであれば、どういった授業、どういった学びを提供していくのがいいのかという点で、ポイント1が、外国語で社会的活動を行うというパフォーマンスに達成目標を置く。これがまず1つ大きな、大事なポイントだと思えます。結局、その言語をいかなる形で習おうとも、何ができるのですか、それで、というところに答えられないと、やはりここにつながってこないのではないかなと。あるいはそれがあまりにも見えづらいのではないかなと。「何のため」をより可視化していくということが大事なのかなと。つまり学びの結果ですね。学習過程に対してなぜの回答を与えることができるかと書いていますが、パフォーマンスに達成目標を置く。つまり、これができるようになるためにこれを学ぶのですよということがはっきり教える側として自覚しているし、学んでいる側もそれを理解していれば、なぜそれをやっているのかがよく分かると。

ポイントの2番目が、その語学の学びの過程自体がパフォーマンスに直結することを可視化すると。ちょっと重複しますが、ここが重要なところというのは、やはり自分がやっている学びがどういう結果をもたらすのかというところをイメージできるという事。何を評価されているのかがはっきり見えるということは非常に学習者にとってはモチベーションが高まる。これをやればこれができるようになるという点ですね。私はどちらかというあまり我慢強いタイプではないので、何か努力すると早く結果が欲しい。学生さんは若いので、これはちょっと偏見かもしれませんが、もう今日やったら明日にはもう英語がペラペラに話せればいいな、なんて、やはり努力の対価がすぐ見えるというのはやっぱりうれしいし、モチベーションにつながる。これを小さな単位でも構わないので、教育の現場に反映していくことで、自分自身の学びがよく見えると。これも1つ大事な視点かなと考えています。【スライド④-6】

具体的な例として、今の話の実例といいますか、ケースの紹介としてお話した

いのが、本学における英語のディベートコースの開発の背景です。今 2021 年です。3 年前から全学の 1 年生必修科目として英語ディベートコースの開発に着手を開始しました。一番の大きな理由としては、その当時グローバル・コンピテンスとは言っていませんでしたが、そこに含まれる能力を英語能力と同時に育成できるようなコースが開発できないのかなど。それからもう 1 点が、社会的活動に重点を置いたコースの開発。ディベート、議論したりするというの一種の社会的活動ですよ。その前身としてディスカッションコースというのが、これまで立教の 1 年生の必修科目として長く運営されてきた背景もあり、スピーキングにフォーカスした非常に素晴らしいコースなのですが、そこからもう 1 段階上の専門的な知識を学びながらより高度なスピーキングができるような、そんなコースを作れないかなというところで開発に着手しました。グローバル・コンピテンスの様な広義で普遍的な能力の育成、英語能力の育成がリンクしたコースです。

実際このコースを作るにあたって、大学に入学したばかり、高校卒業したての学生が英語でディベートをできるのかという点で、反対といいますが、先生方から多くのご心配の声をいただく事もありました。昨年、無事に開講しまして、今のところ大きな問題がなく運営ができています。ただ、そこまで行くには本当に多くの先生方の助けをいただいて、特に英語のディベートを教える教科書というのは、実はネイティブ向けのものというのは結構あるのですが、英語学習者用の商用の教科書にないですし、日本語で書かれたものはあるんですが、やはり我々の目指す方向性と合致させていくためには、オリジナルの教科書を作らないと駄目だなというところで、独自の教科書を作成しました。今こちらにディベートのコースの広報用ビデオのリンクをお見せしていますが、実際に受講した学生さんの生の声だとかも聞けますので、もしお時間があれば、後日ご覧になっていただければと思います。【スライド④-7】

こちらがその教科書なのですが、今は第 2 版で、昨年の初版の利用後、教員や学生に大規模なアンケートを実施しまして、その調査と分析の結果をもとに、今年度さらに大幅な改訂をしまして、第 2 版を現在利用して授業を行っています。【スライド④-8】

こちらのディベートコースの目的についてなんですが、英語のディベート活動を通して以下の能力を養うということで、これは抜粋なのですが、ディベートに

必要な知識の醸成を行う、それから議論の組み立てや発信、それからチームワークですね。批判的思考能力や分析能力、情報収集能力といった形で、先ほどのグローバル・コンピテンスとオーバーラップするところがたくさんあると思います。チームワークと一緒に英語のディベートという特定の社会活動を行う為に学習をしていくと。立教には本当に多様なレベルの学生さんがいらっしゃいますが、全てのレベルの学生さんたちが、英語力の差が出る部分ありますが、形としてちゃんとディベートができるところまで行けているというのが昨年の授業の結果ですね。現在私も1クラスを担当していますが、ミニディベートを、先々週ぐらいにオンラインで実施したのですが、正直驚きました。あまりレベルの高くないグループを教えています、それでも驚くほどによくできていて、こちらが舌を巻いてしまったという。【スライド④-9】

ここからちょっと評価の部分となりますが、やはり教える内容と評価には非常に重要な、密接な関係性といいますが、絶対に切っても切り離せない関係性があるって、何を評価するかというのは、結局学びの目的とそのまま一致してきますので、このディベートのクラスではどういった評価を用いているか。その一部をご紹介しますと思います。当然このコースの核となるのはディベートという社会活動を行う、これを英語で行うということなので、その評価に用いているルブリックは、ディベートという社会的活動への効果的な参画のために必要な役割やステップとその性質を基準に評価カテゴリーを作成して、それをもとに評価を行っています。1つは議論の構成や議論の質、それから、ここは日本語だと尋問質問という、犯罪者にやっているみたいな感じですが、クロス・エグザミネーションですね。議論に対する質問、それから応答という流れがあり、最後に反駁、Rebuttal というものがあります。最後にそれぞれのチームがそれぞれの議論を要約して終了すると。一般的なディベートのコンテストとか競技的なものと、この後に参加者の人からの投票なんかがあったりするのですが、当然そういうところはやっていません。

このルブリックのポイントなのですが、このカテゴリーの中に実は英語の能力を問うカテゴリーは一切含まれていません。なので、ちょっと不思議な違和感を覚えられるかなと。これは英語のコースなので、英語の授業、英語の語学の授業ですかと聞かれたら、そうですよと私は答えますが、二番目のポイントが、これがまた面白いところですが、通常は大学の成績評価というと個人評価ですよ

ね。この個人評価というのは、常に個人の能力のみに焦点を置いているんですけども、今話しているこのグローバル・コンピテンスもそうですが、協調して、他者と協働して何かを行う場面というのは、実は社会活動の中ではごく当たり前にあって、個の突出した能力のある人だけが光ればいい世界では全然ないですよ。足りないところを補い合うというのが当たり前に行われるのが、やはり社会、これは言語にかかわらずそうだと思うのですが、それがそのままこの評価法に反映されています。ディベートの能力の評価に関しては個人評価ではなくて、チームでの評価を採用しています。なので、個人評価主義とは、相対的な位置づけとなります。授業全体の評価では実際はハイブリッドで行っていますが、このディベートという部分だけに関しては個人評価ではなくてチーム単位での評価を採用しています。【スライド④-10】

こちらが実際のパフォーマンスルーブリックなのですが、先ほど日本語でまとめたものなので、参考としてご覧になっていただければと思います。【スライド④-11,12】

まとめとなりますが、このディベートのコースの評価方法だとか、その裏にある概念をちょっと考えていただいて、まず狭義の意味での外国語能力という定義からの脱却を図ろうとしているということが大切な点です。英語能力と言ったときに、ただの読み書きとか、話す、聞くという次元ではなくて、社会活動を行うための能力と定義しています。なので、もちろんその中には文法能力や単語力なんていうのも入ってくるのかもしれないですけども、実際には必要なものを必要なだけ学んでいただくような授業の構成になっています。なので、入り口はもちろん皆さんレベルが違うので、最初は難しいと感じる学生もいますけれども、学びの導線がはっきりしているの、これと、これと、これを学べばこれができるようになるよという道筋がはっきりしているコースです。そういった意味で、あまりレベルの差が、指導上は出にくいところがあるかなと思います。それから、あとディベートという具体的な社会的活動を効果的に行うという方向性、これはもう先ほどから申し上げているとおり、英語という言語を使って社会的活動を行うという方向性が明確に提示されている。ディベートを準備、実施する学びの過程そのものに、先ほどの様々な能力群、いわゆるグローバル・コンピテンスの育成が含まれています。評価に関して言えば、当然、社会活動の核となる部分を抽出して評価するということで、最終的には、もちろん定義はさまざまあ

ると思いますが、先ほどのスライドでお見せしたようなグローバル・コンピテン
スの少なくとも一部の育成につながっていくコースであると考えております。【ス
ライド④-13】

すみません、あまりまとまりがない気がしますが、以上で私の話は終わりになり
ます。ありがとうございました。【スライド④-14】

○丸山 三島先生、どうもありがとうございました。それでは、ご質問、きっと
いろいろな先生方、参加者の皆様おありかと存じます。ですが、時間の関係で、
また後で全体協議もご致しますので、お一人かお二人人ぐらいご質問、またコメ
ントありましたらお願いできればと思います。坂本先生、お願いいたします。

○坂本 すみません、もしかしたらちょっと聞き逃しがあるかもしれないんです
けれども、ループリックのところについて、僕自身ループリック好きなのですが、
言語の部分が入っていないというところで、その入っていない理由についてご説
明されましたか。

○三島 していないですね、多分。入っていない理由は、英語の能力でくくると、
社会活動の参加の仕方というのは、英語能力で測れる部分というのは結局最終的
には洗練性の話になってくるんですよね。挨拶でも、これ結婚式でも何でもいい
んですけれども、めちゃめちゃ上手な人から全く上手じゃない、ずっと何か訳の
分からんこと話しているとか、言語能力の部分というのは、社会的な活動に参画
するための最低限の下地はあるとして、最後はその洗練性、例えば単語がうまい
とか、文法云々、要は正確性ですよね、アキュレシーが高いとか、それっても
うレベルが、例えば学生さんは、立教の場合は4つに分かれていますから、差
が出る事が分かっていることなんですよ。なので、それを入れてしまうと、どう
いう洗練性のレベル、質でということ話になってしまう。英語という部分だけ
切り取ってではなくて、社会活動に参画する、その手段を得るとというのがコース
自体の目的になっているんですよね。なので、極端な話、英語でそれを行うだけ
であって、英語能力を伸ばそうっていう目的をはなから掲げていないというのが
変な話。ただ、これ逆説的なんです。やっていたら英語能力ももちろん伸びるん
ですけれども。だから英語のコースですかと聞かれると、どっちなんだろうと感
じられると思います。私はそうですよとは言いますが。そこは難しいところなん
で、でも、そういうことなんです。目的として英語能力の改善を掲げているので
はないんです。英語でディベートを行うためのコース。

○**坂本** そうすると、例えば指導の過程でこういうふうな表現を使ったらいいんじゃないとか、そういう提案とかいうのは教員側からないんですか。

○**三島** 教科書には、実は既にテンプレ式でディベートの各フェーズごとに使えるフレーズが全てまとまっています。1 レッスンごとにもちろん小さくやっていますけれども。例えば議論を構築するステージがあり、クロス・エグザミネーション、尋問をするフェーズがあったり、そこで使われるフレーズ群が幾つもグロッサリーとして付いているんですね。学生はそのテンプレを利用して、自分たちで互いに協力しながらスピーチを作っていきます。なので、これは自発的な、何かいきなり質問されてポンと話す、ディベートというのはそういうものではなくて、スポンテニウスなスピーチではなくて、プランドスピーチなんですね。よくよく計画されて話し合っただけで練られた、そういったものなので、当然いろいろ話し合いながら、もちろん辞書を使ったり、学びの過程そのものが、実は英語能力の向上にもつながっていくという考え方ですね。なのでツールを与えて、つまりこれサンドボックスなんですよ。この枠組みの中で組み立ててくださいねという形になっています。

○**坂本** ありがとうございます。

○**丸山** ありがとうございます。それでは、司会の任先生、お願いいたします。

○**任** 三島先生、貴重なお話をありがとうございました。

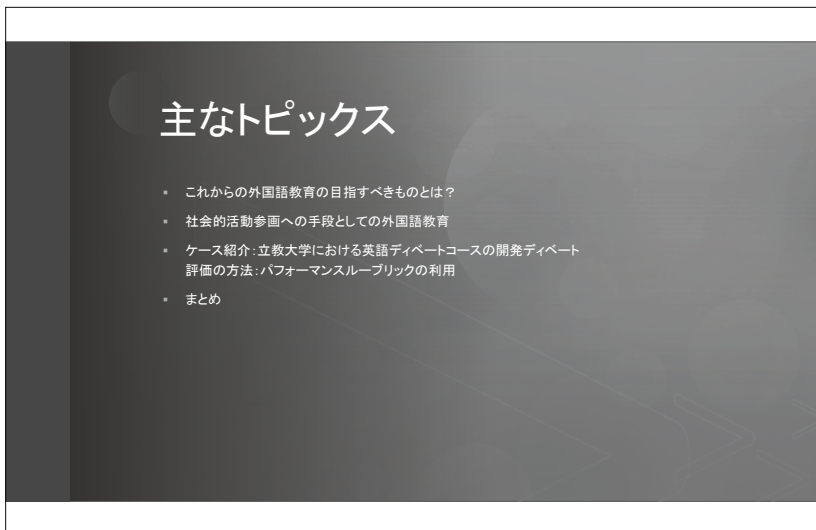
【スライド④-1】



外国語教育の新しい形：
社会認知的視点からみる学習評価

三島 雅一 准教授
外国語教育研究センター
立教大学

【スライド④-2】



主なトピックス

- これからの外国語教育の目指すべきものは？
- 社会的活動参画への手段としての外国語教育
- ケース紹介：立教大学における英語ディベートコースの開発ディベート
評価の方法：パフォーマンスルーブリックの利用
- まとめ

【スライド④-3】

これからの外国語教育の目指すべきものとは？

- 従来型のポイント①：外国語能力(4技能の育成)＝スキルベース

画像転載元: Eikoh Inc (2021)

FOR WHAT?

- 問題点：技能に焦点を置くが、コンテキストの不在が顕著。どこで、誰と、どのような場で読み、聞き、書き、話すのか？

【スライド④-4】

これからの外国語教育の目指すべきものとは？

- 従来型ポイント②：語学能力の孤立
- 問題点：外国語教育のより多様な目的と意義の過小評価？

語学能力 = ?

専門的知識

異文化理解力


コミュニケーション能力

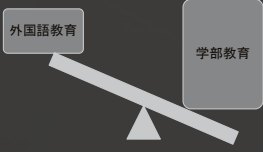
批判的思考・分析能力

国際社会活動能力 (グローバルコンピテンス)

【スライド④-5】

「これからの外国語教育の目指すべきものとは？」


 学部教育偏重型の大学教育でグローバルコンピテンスの育成に十分なのであろうか。



外国語教育

学部教育

【スライド④-6】


社会的活動参画への手段としての外国語教育

- 社会認知的視点からの言語とは
 「社会認知視点から観ると、言語とは社会的活動を行う為の手段である。即ち魚を売ったり、議論したり、話を共有したり、子供をなだめるといった様な活動である」(Atkinson, 2011, pp. 146; 訳: 三島 雅一)
- 外国語教育の目的は、グローバル社会における様々な**社会的活動**に対し効果的に参加できる能力の育成。
- ポイント①: 外国語で社会的活動を行うというパフォーマンスに達成目標を置くことでスキルやその他の学習過程に対して「なぜ」の回答を与えることができる。
- ポイント②: 語学の学びの過程がパフォーマンスに直結する事を可視化する事ができる。

【スライド④-7】

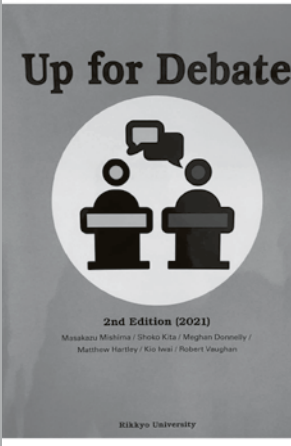
ケース紹介:立教大学における英語ディベートコースの開発

- 2018年より全学一年生必修科目として英語ディベートコースの開発に着手。
- 2020年に開講。
- 本コース独自の教科書を作成
- 参考: ディベートコース紹介ビデオ (<https://youtu.be/wNH8qf90QzI>)



画像転載元: Parliamentary Debate Personnel Development Association, (2019)

【スライド④-8】



Up for Debate

2nd Edition (2021)

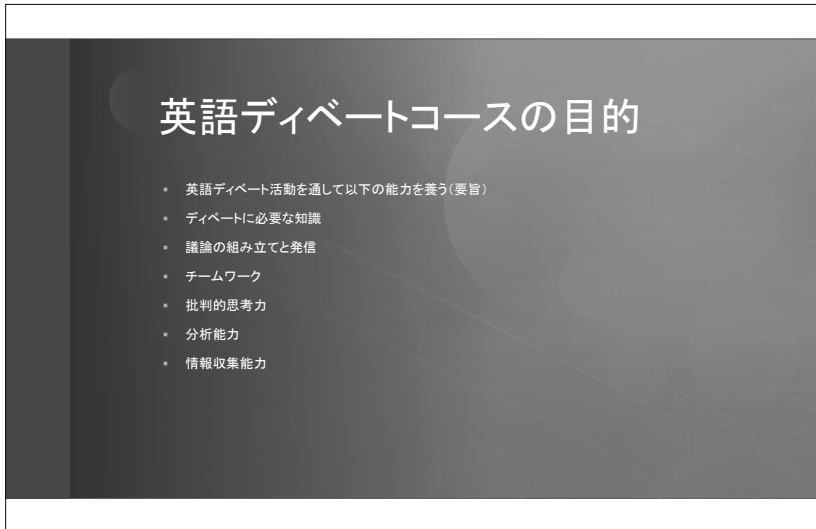
Masakazu Mishima / Shoko Kita / Meghan Donnelly /
Matthew Hartley / Kyo Inai / Robert Vaughan

Kikkyo University

オリジナル教科書

- Up for Debate 2nd edition (2021)
- 初版に対する教員・学生のアンケート調査を元に大幅な改定

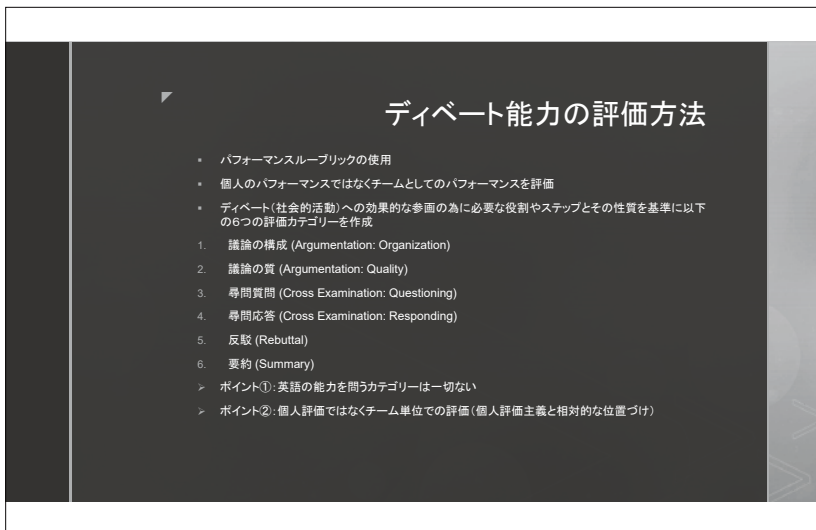
【スライド④-9】



英語ディベートコースの目的

- 英語ディベート活動を通して以下の能力を養う(要旨)
- ディベートに必要な知識
- 議論の組み立てと発信
- チームワーク
- 批判的思考力
- 分析能力
- 情報収集能力

【スライド④-10】



ディベート能力の評価方法

- パフォーマンスルーブリックの使用
- 個人のパフォーマンスではなくチームとしてのパフォーマンスを評価
- ディベート(社会的活動)への効果的な参画の為に必要な役割やステップとその性質を基準に以下の6つの評価カテゴリーを作成

1. 議論の構成 (Argumentation: Organization)
2. 議論の質 (Argumentation: Quality)
3. 尋問質問 (Cross Examination: Questioning)
4. 尋問応答 (Cross Examination: Responding)
5. 反駁 (Rebuttal)
6. 要約 (Summary)

- ポイント①: 英語の能力を問うカテゴリーは一切ない
- ポイント②: 個人評価ではなくチーム単位での評価(個人評価主義と相対的な位置づけ)

【スライド④-11】

ディベート能力の評価方法

Appendix B

Debate Performance Assessment Rubric

Category/Issue	1	2	3	4
Argumentation (Organization)	<ul style="list-style-type: none"> The presentation of arguments flows logically. Information is organized in a coherent manner. 	<ul style="list-style-type: none"> The presentation of arguments is generally clear. Information is mostly organized. 	<ul style="list-style-type: none"> The presentation of arguments is somewhat clear. It shows some individual organization of ideas. 	<ul style="list-style-type: none"> The presentation of arguments is somewhat incoherent. It shows some individual organization of ideas.
Argumentation (Depth)	<ul style="list-style-type: none"> Plenty of strong arguments with supporting evidence from a wide range of sources. Demonstrates various perspectives, which effectively contributes to the development of arguments. 	<ul style="list-style-type: none"> Many fairly strong arguments that show good perspective due to insufficient supporting evidence. Major issues about the topic are covered. 	<ul style="list-style-type: none"> A few potentially persuasive arguments. Most claims are not supported by relevant evidence. 	<ul style="list-style-type: none"> No effective involvement in the debate.
Class Examination/Questioning	<ul style="list-style-type: none"> Asks clear and specific questions related to the arguments for clarification. Asks clear and specific questions related to the quality of evidence. 	<ul style="list-style-type: none"> Asks questions related to the arguments but the questions are somewhat unclear. Asks questions related to the quality of evidence, but the questions are somewhat unclear. 	<ul style="list-style-type: none"> Asks questions related to some or all of the arguments. Asks questions that clearly contribute to the quality of evidence. 	<ul style="list-style-type: none"> No effective involvement in the debate.

【スライド④-12】

ディベート能力の評価方法

Class Examination/Questioning	<ul style="list-style-type: none"> Asks questions that demonstrate clarity and specificity. Asks questions that are relevant to the issues presented. 	<ul style="list-style-type: none"> Asks questions to the debaters, but the questions are somewhat unclear. Asks questions to the debaters, but the questions do not fully understand the quality of the evidence. 	<ul style="list-style-type: none"> Asks questions to the debaters, but the questions do not clearly identify the points raised by the other side. Asks questions to the debaters, but the questions do not fully understand the quality of the evidence. 	<ul style="list-style-type: none"> No effective involvement in the debate.
Rebuttal	<ul style="list-style-type: none"> Accurately defines and clearly explains the opposing side. Being able to identify with the main points of the opposing side. Demonstrates highly effective team collaboration to respond to a rebuttal. 	<ul style="list-style-type: none"> Accurately defines and clearly explains the opposing side. Being able to identify with the main points of the opposing side. Demonstrates effective team collaboration to prepare for a rebuttal. 	<ul style="list-style-type: none"> Fails to define for some issues and/or does not accurately define the opposing side. Minimal team collaboration to prepare for a rebuttal. 	<ul style="list-style-type: none"> No effective involvement in the debate.
Summary	<ul style="list-style-type: none"> All key points are summarized. 	<ul style="list-style-type: none"> Some of the key points are summarized. 	<ul style="list-style-type: none"> Few or no key points are defined in the summary. 	<ul style="list-style-type: none"> No effective involvement in the debate.

A rubric is a tool used to evaluate the performance of students in a classroom. It is a tool that can be used to evaluate the quality of student work. The rubric is a tool that can be used to evaluate the quality of student work. The rubric is a tool that can be used to evaluate the quality of student work.

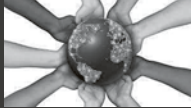
【スライド④-13】

▼ **まとめ**

- 狭義の外国語能力という定義からの脱却
- ディベートという具体的社会的活動を効果的に行うという方向性
- ディベートを準備・実施する学びの過程
- ディベートという社会活動の核となる部分を抽出し、評価する

↓

- グローバルコンピテンス(一部)の育成



画像転載元: Getting Smart.com (2021)

【スライド④-14】

▼ **参考文献**

- Atkinson, D. (Ed.). (2011). *Alternative Approaches to Second Language Acquisition*. Routledge.
- Mishima, M., Kita, S., Donnelly, M., Hartley, M., Iwai, K., & Vaughan, R. (2021). *Up for Debate (2nd ed.)*. DTP Publishing.